

5

東京学派の史学史：史料編纂所 海外史料室の視点から

—— 松方 冬子（東京大学史料編纂所 教授）

はじめに：東京学派は存続できるか

この科研にお誘いいただいた時から、私のなかで「東京学派」というテーマは、「英語化の波の中で東京（＝日本）学派は存続できるか？」という問いを意味していた¹。「東京（＝日本）学派とは何か？」と問われれば、私の答えはただ一つで、「西洋言語の、漢語を多用する日本語への翻訳」である²。日本語は、韓国語やトルコ語と同じく、いわゆるウラル・アルタイ語の一種であるから、2種類の全く違う外国語（漢語、西洋言語）を使いこなさないと、東京学派の学徒にはなれない。漢語と日本語だけなら昌平黌^{しやうへいこう}でもやっていただろうし、西洋言語だけでよいなら、オックスフォードでもやっていることである。

しかしこのことは、東京学派の学徒に、2つの二律背反を背負い続けるバランス感覚を要求する。中国に憧れ、中国に認めてもらおうとするという意味で、本質的に親中国であるが、中国との違いを気にし、中国からの独立を維持しようとし続け、中国からバカにされることを恐れるという意味で、本質的に反中国である。同じように、親欧米であるとともに、反欧米である。もちろん、全員が4つのなかで完全にバランスをとっているということもなく、人によってはどちらかの軸が強いと思われるけれども、全体としてはこのバランスをとり続けることが、宿命である。

そして、全体としては、（対中国の漢学であれ、対欧米の洋学であれ、）矢

1 以下、申し訳ないことに、エッセイ（風の文章）である。研究論文ではないので、ご了承ください。
2 なお、本シンポジウムの総合討論において小野塚氏より、類似のことが19世紀から20世紀のドイツでラテン語からゲルマン語への翻訳という形で起き、それがその時期のドイツの学問の発展に寄与したのではないかとのご指摘をいただいた。

印が内向きの輸入学問であることは否めず、それが今、最も課題視されている点だろうと思う。(つまり、輸出することが期待されているということだろう。)

史学史瞥見

以下、独断と偏見により、駆け足で、東京学派の史学史を見ていく。

まず、今回のテーマの一つである1920年代は「帝国主義の時代」「講座派の時代」と言えるだろう。この時代に講座派が生まれたということは、つまり慶応の瓦解（いわゆる明治維新）以降、ヨーロッパ由来の近代歴史学についての勉強を重ねてきた日本人が、この時代にマルクス主義史学の日本的な理解、もっと踏み込むならば、日本的な近代歴史学の語りを定着させたということではないだろうか（同時に、ヨーロッパの歴史学がこのころ「文明史」から「国民史」へシフトしつつあったことと、軌を一にしていたのかもしれない）。講座派については、私はまだまだ不勉強なのであるが、1930年代の大陸進出を準備したものの一つだと考えている。現在の日蘭関係史の立場から言えば、1928年に台北帝国大学が設立され、南洋史講座が置かれたことが特筆される。

しかし同時に、1920年代は国際主義の時代でもあった。国際学士院連合（Union Académique Internationale/UAI）が1919年に設立され、日本は最初の加盟11か国の一つであった。1922年には、帝国学士院のUAI関連事業「在外未刊行日本関係史料」が開始された。国際歴史学会議（Comité International des Sciences Historiques/CISH）が創設されたのは1926年である。

国内に目を転ざると、1920年代は民藝運動が起きた時代でもある。1926年、「日本民藝美術館設立趣意書」が発刊された。来るべき大量生産・大量消費の時代を前に、すたれつつある手仕事の良さを再評価すると同時に、それを新しい時代のグラフィックデザインやインダストリアルデザインに生かすことを考えた人たちがいたということでもある。

1930年代は、「皇国史観の時代」ということになるだろうと思う。皇国史観の内容については、私自身、丁寧に研究したわけではないが、結局のところ、後期水戸学と同じ類のように感じられる。私の暫定的な評価は、「日本の民族主義運動」というものであって、国民に語りかける歴史学という意味では（逆説的に聞こえるかもしれないが）戦後史学の始まりのようにも思われる。

一方で、「変わらぬ歩みも続けられていた」と言うことも可能だろう。台北帝国大学南洋史講座には、村上直次郎、岩生成一、小葉田淳、箭内健次、中村孝志らが集まり、オランダ語史料を読み続けていた。一方、維新史料編纂事務局『維新史料綱要』が出版されたのは、1937年から1943年のことである。維新史料編纂事業は、1949年に当時の文部省から東京大学史料編纂所に移管された。史料編纂所では、2019年から維新史料研究国際ハブ拠点事業を開始し、『維新史料綱要』綱文の英訳を始めているから、現在でも同書はまさに現役の書物である。もちろん、南洋史研究も維新史料編纂事業も、当時の国家のあり方や帝国主義といったものと無関係であろうはずがない。しかし、平泉澄の皇国史観に対する批判ほど激しく批判されることは、聞いたことがない。

1950年代は、講座派の復活、農民闘争史の隆盛という見方がされることが多いような気がするが、戦後の歴史学にとって最も大きな変化は、中等教育の拡大に伴う「パイ」の急拡大であろうと考えられる。また、農地解放に伴い、農村史料調査が本格的に開始され、研究者が使える日本近世史料の量が飛躍的に増えた時代でもあった。

1960年代は、今回のもう一つのテーマであり、日本史学の黄金期と言ってよいだろう。家永三郎ほか編『岩波講座日本歴史』全23巻（岩波書店、1962～1964年）、井上光貞ほか編『日本の歴史』全26巻、別巻5巻（中央公論社、1965～1967年）、和歌森太郎監修『学習漫画 日本の歴史』全18巻（集英社、1968年）が相次いで世に出た。今でも、これらの後継出版物は刊行され続けており、基本的なデザインに大きな変化は見られない。同時に、1968

年を一つの画期として、日本近世史は、「幕藩体制論」(武家領主と農民闘争の対抗関係で歴史を見る)から、「幕藩制国家論」へと移行していくことになる。一言で言えば、武士と農民だけでなく、都市、被差別民、公家、対外関係など、幅広い分野での実証面の進展で、もはや空白を埋め尽くした感さえある。

1980年代から研究活動を開始した私の直感的な評価で言えば、どういう論なのかよくわからない「幕藩制国家論」は、たぶん(アメリカ由来の?)ポスト・コロニアル的であり、「金持ち批判」「偉い人批判」の要素を持っていたように思われる。対外関係史に限れば、アメリカ型地域史研究(比較文明史観)の影響としての「海禁・日本型華夷秩序」論の登場は、大きな変化であった。しかし、一方で、「鎖国」派も根強く存在し、おそらく背景には日本史のグランド・ナラティブが講座派から完全に脱却していないことがあるのではないだろうか³。

現在の到達点

飛んで、2010年代、2020年代を見てみると、「歴史修正主義」の登場が見逃せない問題となっていると思う。その内容は、ポスト・コロニアル的な歴史観を「自虐史観」として批判しようとしているように思われ⁴、講座派を飛び越えて、水戸学、皇国史観的な見方に戻ろうとしているかのようである。

現在の地点に立ってみると、歴史学のために伝統的に立てられてきた問い「日本はなぜ植民地にならなかったのか?」⁵は、問いの時点ですでに「欧米列強」の優越性を認めたくらんで、その「侵略」に対して独立を守った「素晴らしい国」として日本を位置づけようとするものであって、講座派であれ、水戸学であれ、その意味ではあまり変わらないようにさえ思われる。

3 このころ、「東アジア」が研究上のキーワードとして魅力を放っていた。1970年代の日中国交回復と、その後のバブル景気を受けて、東京学派によるある種の「知の帝国」の再編の機運があったということなのかもしれない。ひきつづき考えたい。

4 私の知識は、おもに伊藤昌亮『ネット右派の歴史社会学—アンダーグラウンド平成史、1990～2000年代』(青弓社、2019年)に基づいている。一方で、反ポスト・コロニアルの歴史観が日本にのみあるわけではなく、欧米でも見られることには注意をむける必要があると思っている。

5 たとえば、平川新『戦国日本と大航海時代—秀吉・家康・政宗の外交戦略—』(中公新書、2018年)。

(帝国学士院から改名した)日本学士院UAI関連事業「在外未刊行日本関係史料」は、2022年に100周年を迎える。おそらく、今問われるべきは、「蒐集して、どうなったのか?」「日本関係海外史料を蒐集すると、世界の歴史学にどう貢献できるのか?」ということである。もちろん、『日本関係海外史料』の編纂は史料編纂所で続けられており、UAIにも報告され続けているのだが、それだけでよいのだろうか?

2020年夏、同事業で最初に蒐集が開始され、今でも大きな部分を占めるオランダ東インド会社文書、日本商館文書などの高精細デジタル画像が、所蔵者であるオランダ国立中央文書館のサーバーから全世界に向けて、オンライン公開を開始した。とりあえず、利用が格段にやすくなった状況を受けて、少しでも多くの方に読んでいただくべく、拙編『オランダ語史料入門』を執筆中であるが、今まで100年間かけて蒐集してきたマイクロフィルムの山を思うと、感無量である。

以上をまとめてみると、帝国主義とかマルクス主義(講座派とは、つまりマルクス主義史学の理解がそれだけ進み、日本的な解釈として定着した状態ともいえるだろう)、国際主義、民族主義運動、パイの拡大、農村史料調査、ポスト・コロニアリズムなど、(東京学派の)外からの影響を多分に受けつつも、東京学派は着実に(その時々で入手可能な)史料を読み続けてきたと言えるだろう。一方で、底流としての、もしかしたら水戸学以来の「日本史」

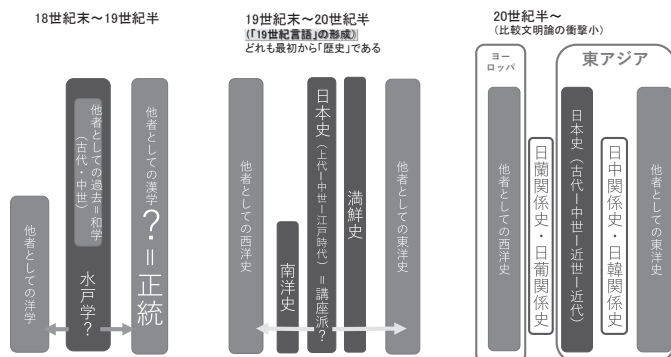


図 日本の歴史学の変遷のモデル(左から右へ)

とそれをめぐる世界観には、大きな変化なく、東京学派の学徒は深刻なアイデンティティ・クライシスに陥ることなく来たと言えるかもしれない。

もう一つ受け継がれているものとして「世界はコワイ」という世界観の問題も考えておきたい。これは、講座派の特徴として指摘されたことがある⁶が、じつは（後期）水戸学由来のようでもあり⁷、現在にも残っているように思う。それこそが「日本」「日本人」の自意識の外縁を作り出してきたように思えてならない。

もちろん、おしなべて自意識には外縁が必要なのだろう。水戸学なり講座派なりの担い手が、19世紀半ばから20世紀初めごろに海外を見たときには、たしかに、外は帝国主義の時代でもあり、欧米の学問潮流は社会ダーウィニズム的なものであったのかもしれない。しかし、仮にその時代には必要な境界、「壁」であったのだとしても、今でもその世界観は有効なのだろうか。今までその世界観が維持されてきた理由は何だろうか。

東京学派の可能性

もう一度、最初の問いに戻ろう。「東京学派は存続できるか？」という問いよりも、「東京学派を存続させる努力をすべきか？」という問いのほうが正確かもしれない。

インプットも英語、アウトプットも英語なら、そんなに大きな負担でもないはずである。（現在われわれが日本語の研究史を読み、日本語で論文を書いているのと、本質的にはさほど違わない。）そのかわり、今までの日本語での研究蓄積は読まれなくなり、忘れられてしまう可能性もある。

「西洋言語の漢語を多用する日本語への翻訳」という作業は、膨大な時間

6 奈良勝司「明治維新における自我認識の展開と国際秩序の展開」山下範久ほか編『ウェストファリア史観を脱構築する—歴史記述としての国際関係論—』（ナカニシヤ出版、2016年）、「日本史においては近代日本が西洋秩序に参入したことは認めるものの（中略）実は彼らはそこに、秩序の不在こそを見出していたのである。」（同書、152頁）。

7 もっとさかのぼれば、大槻玄沢ら洋学者の言説にも影響を受けているように思われる。現在でも、日本近世史の対外関係は、18世紀以降「対外的危機」とか「外圧」とかの言葉で説明されるが、本当に「対外的危機」「外圧」だったのかを問い直すことはあまりないように思われる。個人的には、大槻玄沢に騙されているような気がする。

と労力を要求する。さらに、これによって、欧文脈と漢文脈の双方に目配りし、「2つの二律背反を背負い続けるバランス感覚」を持ち続け、実際にバランスを取り続けることは、非常に難しい。これは東京学派の学徒にとって当たり前すぎて、もはや誰も愚痴も自慢も言わないが、客観的には銘記すべきことではないだろうか。

それだけの労をとってきたのには、それなりの理由がある。だからこそ誇りがあるし、そう簡単には放棄できない。

一つには、複数の世界観に架橋すること。それだけ豊富な内容を持っているということでもあり、うまくいけば大きな成果が出る可能性を持っていると言えるだろう。

二つ目には、その稀少性。タイでもインドネシアでも、学部教育まではタイ語、インドネシア語でやっているようであるが、大学院の博士課程となると、ほぼ英語に頼る向きもあるように思われる。つまり、学問をヨーロッパ語以外の言語で完全に賄えているところは、寡聞にして知らないが、東京学派（中国、韓国、台湾などが東京学派に属するののかについては、議論の余地がある）だけなのではないだろうか。東京学派がなくなったら、世界の学術の多様性が失われてしまうのではないだろうか。

東京学派の弱点

一方で、東京学派は、本質的な弱点を抱えるとともに、失敗する危険性も大きい。簡単に言えば、バランスを崩しやすい。

弱点の第1は、世界の中で、ガラパゴス化しやすいことである。つまり、独自の発展が外から見えにくく、孤立しがちである。

第2に、東京学派内に、「欧文脈派」と「漢文脈派」があり、かならずしも両者の存在が顕在化していない。そのため、議論がかみ合わないことが多いうえに、その理由がわかりにくい。そのせいか、議論がかみ合わないことに慣れているらしく、議論が嫌いで一人一人、内にこもる傾向がある。

第3に、「欧文脈」と「漢文脈」の「いいとこどり」をしようとして、「あ

ぶはち取らず」になる可能性があるということである。これは、学問内在的に第1、第2の点より難しい問題だと思う。

個人的な感覚だが、ヨーロッパ言語（たとえば英語）には、「アゴラ」とその外を区別する「壁」が感じられる。私は、「壁」が必ずしも悪いとは思わないし、「壁」は、おそらく「啓蒙」(古典古代や、中国など「他者」との出会いによる学び)を経て19世紀に形成された(概念としての、近代の)「ヨーロッパ」にとって必要な境界、ある種の自己防衛だったのだらうと思う⁸。そしてこの壁を構成しているのは、言葉(とくに私が言う「19世紀言語」)であり、別の表現を使えば「二項対立」(文明と自然、ヨーロッパとアジア、など) だらうと思う。ヨーロッパ言語に内在する「壁」を、ヨーロッパ言語によって崩すのは至難であり、現在の欧米のグローバル・ヒストリーが苦勞している点であるように見受けられる⁹。

東京学派が駆使する訳語は、その「壁」——とくに「ヨーロッパ」という「アゴラ」にある「市壁」あるいは「差別」——をあまり感じさせない。その点は大きなメリットである。一方で、東京学派は、「アゴラ」を本当の価値、秩序だとは思っていない節がある。現在の国際政治でも、日本人の政治家がヨーロッパ的な価値を「普遍的な価値」と言っているのを耳にするが、彼らの行動を見る限り、本当にそう思っているかどうかは疑わしい。ヨーロッパ言語における「アゴラ」は、少なくとも人文学——経済学や政治学や社会学や——の全体を成り立たせる共通の価値観のようなものであるように思う。ところが、東京学派の言葉に置き換わると、「そうだといいよね」「そういうものもあるよね」というようなものになってしまうように思われてならない。それは、日本がどの程度近代化しているかとか、東京学派がどの程度予算に恵まれているかとか、そういう外側の事実とはまた次元の違う問題である。

8 このあたりは、心理学でいう「境界」が参考になるかもしれない。ご教示を乞う。

9 拙稿「普遍、アゴラ、グローバル・ヒストリー」(『UP』568-571号、2020年)参照。

では、別の価値観を持って泰然自若としているかということ、そうでもなく、欧文脈と漢文脈に挟まれて身動きが取れなくなっていることもあるように感じる。その辺りを問うてみたのが、東京学派科研の「江湖・無縁・アグラ―もういちど『自由』の在処を探す―」というワークショップであった¹⁰。

「世界史的使命」という誘惑

そこまでくると、第4の、弱点というよりも、もはや危険性が見えてくる。

私は「ヨーロッパ言語に内在する『壁』を、ヨーロッパ言語によって崩すのは至難であり、現在の欧米のグローバル・ヒストリーが苦勞している点である」¹¹ということは、確かにその通りであると思っているし、「漢語を多用する日本語」が、外から「壁」を崩すための武器としての可能性を持っていることも事実で、だからこそ簡単に「漢語を多用する日本語」を放棄することもできない。

けれども、それらのことから、「ヨーロッパの行き詰まりを打開するのは日本だ！」という言説が生み出される可能性もあって、さらにそれが孤立性、ガラパゴス化、議論の軽視、(じつはこれといった価値観もないのか)口先では何を言っても良いという感覚、などと相まって、非常に安易に、「日本人は世界一素晴らしい」という言説に陥りかねない。「日本人は素晴らしい」は間違っていないが、「世界一」とまでは言えない。(どうしてそんなに順位を競おうとするのだろう。)

「東京学派がなくなったら、世界の学術の多様性が失われてしまうのではないだろうか」と書いたけれども、それは「世界の多様性を担保するのは東京学派の『世界史的使命』である」と言い換えられそうである。私は決して

10 2020年7月15日開催。内容は、『ブックレット東京学派Vol.1「江湖・無縁・アグラ―もういちど『自由』の在処を探す―」(2020年12月)で知ることができる。下記URLを参照のこと。
<http://gjs.ioc.u-tokyo.ac.jp/data/essays/uploads/TokyoSchool-01.pdf>

11 拙編『国書がむすぶ外交』(東京大学出版会、2019年)は、『国書』という非ヨーロッパ言語によって「壁」に挑んだものである。Lauren Benton, Adam Clulow, Bain Attwood eds., *Protection and Empire: A Global History*. (Cambridge: Cambridge University Press, 2017)は、Protectionという「壁」の「外」の言葉を使って世界史を書くことで、「壁」を相対化しようとしているように思われるが、それでもまだ「壁」を想起させてしまうように思う。引き続き、検討したい。

日本中心主義者ではないつもりなのだが、言葉に出してしまうと、どうもそう聞こえるような気がしてならない。学生さんを励まそうとして、「東京学派は、西洋言語の漢語を多用する日本語への翻訳という大変なことを日常的にやっているのです」というような話をするのだが、あまりにもあっけなく(?) 顔を輝かせる学生さんたちを見るたび、マズイことを言ってしまったのではないかと不安になる。

東京学派には、「世界史的使命」という誘惑がツキモノということは自覚したほうが良いかもしれない。自覚したうえで、軍事権力、経済権力にそれを悪用されないように気をつけたい。本当に、コワイコワイ、要注意である。

仮に「世界史的使命」があったとしても、それは多様な世界をつなぐ使命であって、間違っても世界に君臨する使命ではない。それに、私の言う「東京学派」は言語の使い方を指す言葉であるから、かならずしも担い手が「日本人」である必要もない。

「世界はコワイ」世界観とロジスティクスの弱体

2017年、国際学士院連合(UAI)の総会が日本で初めて開催された。UAI創設時の加盟11か国中の一つなのに、「ヨーロッパに追いつき追い越せ」だったはずなのに、長い間世界第2位の経済大国だったのに、なぜ100年も総会を開催しなかつたのか?あるいは、開催できなかったのか。これでは、せっかく国際的な組織に参加しても、諸外国から白い目で見られてしまい、もともとコワくない世界もコワくなってしまわないだろうか。

これはおそらく、会議を開くとか、議論をするということに対する軽視から来るのだらうと思う。また、チームワークが弱く、力をなかなか糾合できない。

けれどもそれ以上に、会議を開催することに伴う、ホテルや飛行機、エクスカーション、食事などの手配、予稿集の印刷や種々の連絡などを行う、ロジスティクス(兵糧輸送、輜重、兵站、後方支援)がいかに弱体なことが原因の一つなのではないだろうか。

私の意見では、このロジスティクスの弱さは、「世界はコワイ」世界観が温存される原因となっている（ロジスティクスが弱いから会議も開けなくて国際社会から白眼視される）だけでなく、「世界はコワイ」世界観の結果でもある（世界がコワイからドンパチばかりが評価される）。「国際社会はコワイところ」「頑張らないと国際社会の仲間に入れてもらえない（逆に言えば、頑張れば国際社会の仲間に入れてもらえる）」という言説は、「お父さんはコワイ敵と戦っているんだよ、だから、お母さんも子供たちも、お父さんに従いなさい」という言説の前提として使われてしまっているような気がする。なぜ、お父さんがお母さんや子供たちを従わせなければならないかというと、ロジスティクスを担っているのが、お母さんや子供たちだからである。ロジスティクスは、「女子供の仕事」だと思われているらしい。話は堂々巡りである。

人文学の分野でロジスティクスは、研究室づきの（多くは女性の）短時間有期雇用職員——上のたとえで言えば「お母さん」——や、院生——上の譬えで言えば「子供たち」——のタダ働きによって賄われていることが多い。しかし、このような散発的で個別的なロジスティクスでは、伝統化して今さら工夫がいらぬ国内のものや小規模なものならともかく、新しい企画の大規模なイベントは開催したくとも開催できない。しかも、「ロジスティクスが個別的な人間関係、上下関係、あるいは好意、親切によって（のみ）担われている」という事実すらあまり自覚されておらず、「オレがやると言えば、周辺のこと自動的はどうにかなるものだ」と思われているのではないかと感じることもある。「どうにかなる」のではない、誰かが「どうにかしている」のである¹²。

12 日本近世史の研究者にこの話をすると、「だって、江戸時代にロジスティクスを担っていたのは百姓で、武士に見下されていたんだもの」という返答が返ってくることもあるが、江戸時代はもう150年以上前に終わっているのだ。これからもロジスティクスを軽視し続ける理由にはならないように思う。

東京学派の歴史学を存続させ、発展させるために

私のとりあえずの方針は、「史料を読み続ける」というものである。東京学派が最も愛し、誇りとする翻訳も続ける。翻訳により複数の世界観に架橋することには、意味があると思う。また、翻訳することで「きちんと」読むことも事実である。史料を読むことは、一朝一夕にできることではなく、一度途絶えたら、復活するのは至難である。無数の先人たちの重厚な蓄積は、そう簡単に放棄できない。

将来の夢（あくまでも夢である）は、グローバル・ヒストリーを支える史料学の構築と史料を読む力の継承、読める人材の育成を行う、世界レベルにして市井に開かれた研究所を設立し、「読めない史料があったらTOKYOへ行け」と言われるようになることである。世界中の歴史研究者が論文を英語で書かなければならないとすると、同じヨーロッパ言語でも英語以外の史料は（論文を書くのに不利であるから）世界中で読まれなくなっていくのではないだろうか。各国のナショナル・ヒストリーに直結するものは各国で読まれるだろうが、それ以外の史料は顧慮されなくなるのではないかと危惧する。そういったものを読み続けていきたい。

私は何の権力も持ち合わせないので画餅に帰す可能性は高いが、理解を得るとか資金を集めるという意味では無理であっても、現状の東京学派の力量からすれば、実行能力や人材の確保という点では決して無理ではないと思っている。

多様な言語の史料を読んでいけば、自ずと良いアイデアも生まれるというものである。多様な言語の史料から切り口を探していけば、「壁」を相対化することも容易になるだろう。すでに日本の歴史学には、英語ワールドから見れば「未知の」「未紹介の」実証研究が膨大に蓄積されているのである。分析用語も「漢語を多用した日本語」なのであるからオリジナルである。楽ではないが、発信（輸出）の余地は多分にある。それに、無理に英語で発信しなくても、日本語でもよいから楽しく議論をしていけば、外国からも「どれどれ」と様子を見に来る人もいるかもしれない。……などと言っているう

ちに、我々の英語力も上がっていくのではないだろうか。実際、若い世代の英語力にはあまり不安を感じない。ただ、日本人だけでやってはいけない。韓国人でもタイ人でもブラジル人でもアメリカ人でも、巻き込んでやろう。押しつけではなく、品位と礼節をもって。

一方で、「世界はコワイ」世界観は、できれば克服していきたい。「ヨーロッパ」にしても「日本」にしても、形成されたときには、他者と自分を区別する自己防衛が必要であった。しかし、大人になれば(?)その自己防衛が邪魔になることもあるだろう。うまいぐあいに、それが外れてくれることを願う。そして、間違ってもその過程で、自分を破滅させる方向にはいかないでほしい。講座派と国際主義の1920年代の次に来たのは、皇国史観と分断の1930年代である。願わくば、二の舞になりませんように。

「世界はコワイ」の「壁」を崩すために一番必要なのは、人間力の強化であるが、より具体的には、ロジスティクスを今よりも重視することであるような気がする。研究者だけでなく、ライターとかデザイナーとかIT技術者とか出版社とか、多くの職種の人たちが協力して、新しい道を切り開けばよいのではないだろうか。

そういう意味で、民藝運動の経験は参考になるような気がする。草の根からのボトムアップ(をつないでいく)、国際発信(孤立しない)、安価(史料画像のオンライン公開により「原材料」の「価格破壊」が進行中である)、過去を大事にするだけでなく現在の肯定と未来への展望も大切にする、敵を作らない、自分を肯定する(他人の評価に惑わされない)、「見せ方」を工夫する、その辺りがコツだろうか。

私は、より大規模なロジスティクスを構築するために今よりも強い権力を志向するのではなく、むしろ分散的で柔軟なロジスティクスの構築とそれに見合う中身を目指すことをイメージしている。

おわりに

いろいろと考えてきたが「英語化の波の中で東京（＝日本）学派は存続できるか？」という問いに対する私の答えは「存続できる」である。が、簡単ではないことも確かである。私自身、実際にオランダ語を日本語に訳す傍らで英語の論文を書こうとすると、頭が割れそうになる。まだまだ道は遠そうである。休み休み行くしかない。その間に東京学派が誘惑に負けて、世界一とか言い出して、孤立する道に向かわないことを祈るばかりである。

東京学派の史学史は、結局あいかわらずのあまりぱっとしない自意識のもとに、外からの影響で右往左往を繰り返しつつ、それでも一步一步史料を読み続ける、というものだったような気がする。先人の積み重ねの上に、また一つ石を積む。歴史とはそういうものだと考えることは、過去と未来の中に自分を定置することによって一人一人の人間に安心感をもたらすであろう。

あれこれ考えてこんな文章を書いてはみたけれど、あまり意味もなかったのかもしれない。「東京学派は存続できるか？」という問い自体、もう、どうでもよいような気持ちさえしてきた。ああ、早く史料を読みたい。

第5章 質疑応答

中島：ありがとうございました。いろんな論点が盛り込まれていたかと思いますが、講座派がずっと続いているのはどういう理由なのでしょう。

松方：おそらく、日本社会の根幹を支える役に立っている、ということではないでしょうか。世界は怖いところで、日本は頑張れば世界に伍していくことができるけれども頑張らないと難しい、というような微妙な立ち位置にいる。最初から諦めるという気もなければ、安心して中にいられるわけでもない。だから僕たちは頑張らなくてはいけない、みんなで協力するべきだ、という講座派の思想が社会から支持されているように思います。

中島：松方さんが所属している史料編纂所の海外史料室は、講座派と相性が悪いわけですね。

松方：そうですね。悪いと言っていいと思います。

中島：対話や論争はないんですか。

松方：あまりないです。私が講座派の流れで最も良質な研究者だと思うのは（と言うのも失礼なのですが）、史料編纂所の先輩にあたる維新史料室にいらした宮地正人先生です。宮地先生はご自分で「私の世代以上の読者は、(中略)1930年代初頭の講座派の歴史把握と天皇制的国家論的においをかぎとることだろう」(宮地正人『通史の方法』名著刊行会、2010年、312頁)と書いておられるので、自覚的でいらっしゃる。一方、世界という怖い場所で俺たちは頑張ってきたのだという趣旨のことも書いておられます。ただ、宮地先生に最近、オランダ商館長日記の翻訳(松方冬子ほか編、日蘭交渉史研究会訳『一九世紀のオランダ商館』上・下、東京大学出版会、2021年)ができ

ましたといってお送りしたら、「歴史学を歴史思想の変遷ととらえるのとらえ方もありますが、私など先人たちの労苦の上に今の自分の仕事になりたっていると考える方が自然だと思い」ますというお葉書をいただいて、じつはあまり対立していないのかもしれないとも思いました。思想は対立(?)しているけれども、方法論は理解し合えるといえいいでしょうか。

中島：……それは「いいこと」なんですか。

松方：私としては、いいことのような気がしますけれども。

中島：日本史学は世界の歴史学にとって、独特な位置を占めているというお話でしたね。

松方：世界の中では、日本史は「日本研究の一部」という位置付けですから。「日本史」という学問はなく、「歴史学」では日本史を扱わないのが普通です。CISH（国際歴史学会議）は日本史が歴史学として参加できるほぼ唯一の学会なのだけでも、CISHで頑張る日本人研究者はほとんどない。これはなぜか分からない。

中島：では、小野塚先生はいかがですか。

小野塚：大変刺激的なご発表でした。そうか、こういうふうに見えるのか、私が見えていないところが全部見えているんだというのがよく分かりました。「社会ダーウィニズムとしての講座派」という観点には目を開かされました。

1つお伺いしたいのは、「明治維新は封建制の支配を続けるためのクーデターにすぎず、その後には絶対王政ができた。だから明治維新は革命でも何でもない」というのが、講座派の少なくとも表向きの理解です。ただ、講座派

には、どうも顕教の部分と密教の部分があって（笑）、密教の部分で「明治維新万歳」みたいなところがある。

最近、東大の三谷博先生や渡辺浩先生などの「あれは明治革命だった」と公然と言い放つ本が次々に出ていますね。もはや明治維新だとか封建的絶対王政だとかの議論ではなく、あれは「革命」だったんだと。さらに、辛亥革命もその文脈で捉えたほうがいとまで言いだしている（笑）。そういう風潮を松方さんはどういうふうに見ていますか。

2つめの質問として、僕もずっと、日本では古代史・中世史と近世史との間にすごく大きな溝があると感じてきたんです。それは東京学派の特徴だと思います。

ただ、もっと僕が気になっているのは、東京学派からスピニアウトしてアメリカに行った朝河貫一という人物がいますが、朝河貫一の『入来文書』の読み方を、永原慶二も宮地先生も一切無視している、というより拒否していることです。

「日本の封建制とは何か」という解釈について、朝河貫一やマルク・ブロックなどの欧米型と、日本の講座派ないしは戦後史学との間に非常に大きな溝がある。東京学派が朝河貫一を無視し続けてきたことを松方先生はどうお考えでしょうか。ごめんなさい、異端審問みたいな質問になっちゃって（笑）。

松方：最初のご質問について、三谷先生などの明治革命うんぬんについては、この期に及んで、ヨーロッパの歴史を普遍的なものとして、明治維新がそれのどの段階に当てはまるかを議論するというのは、失礼ながらアナクロニズムのように思えます。

2つめのご質問の、朝河貫一を無視した話は、私も具体的には分かりません。ただ、さっき日本の学問の文脈において、「日本はヨーロッパ並みであるというために日本史は存在している」と申しましたが、アメリカ人はそこを頑張る気はまったくないので、アメリカで研究をしていた朝河貫一も、そこを頑張る気はなくて、その断絶は埋められないものがあつたのではないで

しょうか。

内田：いまの話にいくつか補足をさせてください。三谷先生が明治革命論を言い始めた最初期の例はCISHの中国の済南で行われた大会です。中国での初開催だったので、全体会合のテーマが中国らしく「革命」だったんです。

三谷先生の趣旨は、国際比較を実現するためには明治維新の「維新」を「revolution」と訳すことに躊躇してはならないという議論でした。三谷先生にとっては、CISHのような国際的な歴史研究の動向との提携をかなり意識した提言だったと私は思っています。

もう1つ、松方先生のご発表やさきほどのお話ではすこしCISHを絶対視し過ぎかな、という気がしました。CISHは1920年代に設立されたあと、経済史のようなお金や人気のあるジャンルの学会がどんどん脱退・独立しました。そういった流れから取り残されたヨーロッパの学統がCISHとして残ってしまった面があります。その結果として、なかなかヨーロッパの外で大会を開くことができず、2000年のオーストラリアでの大会がようやく南半球での初開催だったはずですよ。

その意味で、CISHをあまり北極星みたいに考えないほうがいい気になっています。それはアメリカのAAS（Association for Asian Studies、アジア研究協会）が日本史研究の主要学会になっているのも含めて考えるほうがいいのかなと思います。

あともう1つ、『入来文書』の件ですが、永原慶二は「入来院という鹿児島の一荘園の話を日本全体の荘園に適用していいのか？」という論点で、多少は言及しています。永原慶二は入来院の荘園を西南型という区分の一つに位置付けているのです。日本国内での荘園研究が精緻化・細分化した結果を踏まえて、「いろいろある荘園のこの分類の一例が入来院だよな」という紹介のしかたをするのです。

それに対して網野善彦は、荘園や封建制の日欧比較を意識するという、朝河貫一のとときの荘園の位置付けに立ち返るべきだと主張している。荘園の日

欧比較にはロマンがありますが（グローバルな中世研究！）、日本の荘園の多様性を捨象しているくらいはあります。ただ、これも網野の立場からすれば、日本での荘園研究が個別細分化するばかりで研究の行き詰まりを呈している、だから朝河のような日欧比較が必要なのだ、という認識になります。このあたりは永原慶二と網野善彦のライバル関係がうかがえると思います。

松方： CISHは別にそんなに北極星だと思っているわけではありませんが、やはりAASは、歴史学ではなく、アジア研究の学会です。また、アメリカの国内学会であって、日本の日本史研究者が個人として参加できるというだけです（それが悪いということではありませんが）。それを「国際学会」と呼ぶなら、日本の学会も外国人を受け入れれば、すぐに「国際学会」になるでしょう。それに対して、「歴史学」の中に、日本の日本史が参加できる場は少ないと思います。良いか悪いかは別として、CISHは「国際」学会です。もちろん世界経済史学会とかも確かにあって、そういうのに参加している先生もたくさんいらっしゃいますから、私は、CISHを神聖視しているわけではないし、すごく昔風の学界だということは分かっているつもりです。

あと、間違えないでおきたいのは「大会」と「総会」がありまして、「大会」のほうが大きいですね。「総会」というのは、加盟国の理事などが集まる会でもっと小規模なものです。日本で「大会」を開く力はないでしょう。

内田： 前は東欧のポーランドのポズナニでしたね。

松方： そうです。総会は開いたばかりかな。コロナで開催が延びたんですね。総会と同時開催予定であった大会のほうは2022年夏に延期されました。

中島： 他にいかがでしょうか。よろしいですか。松方先生、ありがとうございました。

ブックレット東京学派 Vol. 4
東京学派の研究
—総合シンポジウム—

2022年3月25日発行

発行者 東京大学東洋文化研究所

東京都文京区本郷7-3-1 (東京大学本郷キャンパス内)

編集 内田力

編集協力 江口絵理

印刷所 株式会社サンワ

ISSN 2436-0201